

遺骨返るまで戦いは終わらぬ



米田堅持写真

しんどう・よしたか 1958年埼玉県川口市生まれ。自民党衆院議員、当選3回。母は栗林忠道の二女たか子さん。

映画は前評判が高いようだ。

若い人を含めてたくさんの方があの戦いに関心を持ち、戦争の悲惨さを知ってくれることが、先祖への最大の供養になると思う。

映画の製作にあたって、私を含めた遺族らが作る硫黄島協会

新藤義孝さん（衆院議員）

慰霊の島にできれば

も、脚本の段階から相談を受けた。イーストウッド監督にも撮りに入る前と編集する前の2度、お会いした。「単なる戦争

映画、一方が善で他方が悪という話ではなく、ヒューマンドキメントにしたい」と話してお

われわれは、ただ硫黄島に関心が集まればいい、というわけではない。いいかげんなものを作るならば協力はできない。でも、監督の話聞いて、できるだけのことをしようと考えた。

映画のスタッフは米軍側の資料はもちろん、日本側のものもよく集めていた。軍人の立ち居振る舞いや言葉遣いまで、熱心に調べていた。スタッフ同士いや、そこはそうじゃない。現に

ルのようになっていたりして難しい。しかし遺骨に返ってきてもらうまで、私たちの「戦い」は終わらない。

生き残った元兵士は家族にも戦争の様子を話さないことが多い。今回「父親たちの星条旗」の試写を見て、アメリカでも同じなんだなあ、と思った。つらすぎる体験を思い出したくないのだろう。しかし、後に続く私たちは忘れてはいけない。

現在、島に民間人はおらず、自衛隊の基地があるだけ。島に渡るには制約が多く、遺族や関係者でさえ訪れたことのない人がいる。しかし、遺族以外にも、慰霊のために行きたいという人はたくさんおられる。遺骨収集を完了し、多くの人が訪れることのできる慰霊の島にしたい。それが自分のライフワークだと思っている。

に植えた木が成長してシャング